

乳腺悪性リンパ腫の診断と治療

乳腺悪性リンパ腫は非常にまれな疾患であり、乳腺悪性腫瘍の 0.04 ~ 0.53%、節外性リンパ腫の 1.6%と報告されています。

乳腺原発性悪性リンパ腫の条件は、病理診断が確実に悪性リンパ腫であること、乳腺組織と悪性リンパ腫が密接に関係していること、同側腋窩リンパ節以外に全身性の悪性リンパ腫や乳腺以外の悪性リンパ腫を認めないこと、とされています。

診断:

臨床症状としては他の乳腺悪性腫瘍と比較して両側発生頻度が高く、腫瘤の急速増大が特徴的です。ただ、画像診断や臨床所見の特徴的所見は乏しく、術前診断が困難とされています。超音波検査では乳がん 비해、内部エコーは網目状に薄く認められ、辺縁にも高エコー域は認められません。比較的境界は明瞭で D/W 比は低く、後方エコーはわずかに増強する部分を認めるのみで、特徴的ではありません。術前最終診断には切除生検による組織診断が最も有用であるとの報告があります。

鑑別診断として良性疾患では乳腺内リンパ節あるいは肉芽腫性乳腺炎悪性疾患では浸潤性小葉がんなどがあげられます。

治療:

生検による確定診断の後、化学療法を中心とし、場合によっては病巣部放射線照射を行うこともあります。

予後:

乳がんと比べて予後不良の傾向があります。予後不良因子としては 50 歳以下、腫瘍径が 5cm 以上、腋窩リンパ節転移陽性、同時両側発生、とする報告があります。